高年初産の社会学
―２つの事例から―

Sociology of Older Primipara Childbearing: Two Case Studies

加　藤　朋　江
Kato Tomoe

Abstract

Observing a rising trend of primipara childbearing over the age of 35 in contemporary Japan, this study aims to explore the circumstances of women who have chosen to become older primiparae. In addition, this study examines how their choice of child bearing in “advanced age” is different from choices made at younger ages about whether or not to bear children.A Interviews with two women who chose to become older primiparae were conducted, with questions asking about their personal history, conditions during the gestation period, child care, and insights into their own experiences as older primiparae. Results indicate the following: (1) while the cause of older primipara childbearing has been previously attributed solely to “women’s advancement in society,” this study finds that reasons vary depending on each woman’s situation. (2) As one of the risks for older primipara childbearing, higher rates of lifestyle-related diseases and women’s diseases need to be considered. (3) There are generation gaps with parents about views of pregnancy, childbearing, and nursing. (4) There is less deferrable time for a second child compared with younger primiparae. (5) The women perceive pregnancy, childbearing, and nursing as events about which they have choice, and they tend to have strongly affirmative attitudes about that perception.

1. はじめに

今から 20 年ほどまえ、落合恵美子は「お産と社会学とわたし」という文章において次のように書いている。

この十年ほどの社会の変化で、女の役割はこれまでの家事・育児を中心とするものから大きくはみ出してきた。職業を持ち続ける人もふえているし、子どもが手を離れたあとの女盛りを、さまざまな社会活動や勉強、再就職などで精力的に過ごす人も多い。出産は今や、最後に残された女の役割と

なった。出産は職業生活のハンディだとして拒否するのか、あるいは出産に女として人間としての深い意味を見出すのか、さらに出産するとしても、いつするのか、何回するのか、夫や家族にどのようにかかわってもらうかなど、出産についてどのような態度をとるかの選択は、女性の生き方を否応なくいくつかのタイプにわけていく「天下分け目」になってきている。女はお産を「選択できる」ようになったというより「選択せねばならなく」なってきたのである」（落合 1989：327，初出は 1986）。

出産についてどのような態度をとるかで女性が生き方をタイプ分けされるという指摘は、現代にも十分に通用するものであろう。また、「いつするのか」「選択せねばならなく」なった出産について、上野千鶴子はやはり 80 年代後半期に以下のように書いた。

バイオロジカル・クロック（生物学的時計）という言葉がある。女が妊娠し出産できる生物学的なタイムリミットを表示する。（中略）

子どもを産んだり産まなかったりする選択は、一つや二つではない。しかもこの選択は、ただ一回きりの選択ではない。バイオロジカル・クロックがオンの間中、数十年間にわたってそのつどくり返される、迷いと間違いの多い選択である（上野 1993：111–112）。

文中の「バイオロジカル・クロックがオンの間」という期間をいくつからいくつと見ればよいだろうか。合計特殊出生率の計算においては 16 歳から 49 歳までとされているが、一般的にいって 20 代～ 30 代というのがボリューム・ゾーンであろう。そしてこの間、現代に生きる女性たちの多くが「迷いと間違いの多い選択」にさらされているのではないかと思われる。

2000 年代に入った現在では、オンになったバイオロジカル・クロックの期間の後ろのところで出産を選択する女性たちが増えている。すなわち、2005 年の人口動態統計において、出生数 106 万 2,530 人のうちの母親の年齢別出生数をみると、30 ～ 34 歳が 40 万 4,700 人と最も多かった。また 35 ～ 39 歳は 15 万 3,440 人で、前年より 3,218 人増えている。すなわち、この年に生まれた子どもの半数以上が 30 代の母親から生まれていた。また、そのうちの約 3 割は初産であった（5 万 5,297 人）。40 歳以上の出生数も上昇傾向にある。2005 年は 2 万 348 人と 1958 年以来 47 年ぶりに 2 万人を超え、全体の 1.9％であった。そのうち、その出産が最初のお産である数は 6,724 人であり、この年代にしぼっても 3 人に 1 人が初産である（新井 2006：129–130）。

日本産科婦人科学会の定義では35歳以上の初産婦が高年初産婦と呼ばれており、一般的には初産であっても経産であっても35歳以上で出産することを高齢出産と呼んでいるが、現代においてはこの高年初産および高齢出産の割合が高くなっているといえるだろう。それと連動するように、近年マス・メディアにおいては高年初産・高齢出産をとりあげる頻度が増えてきており、世間一般の関心が注がれるようになってきていることがわかる。たとえば NHK は 2001 年に「きょうの健康」において、「高齢出産のあなたへ」と題して数回の番組を組んだ。また、国立国会図書館が所蔵する図書において、1990 年代以降「高齢＋出産」「高齢＋妊娠」「30 代＋出産」「35 歳＋出産」のキーワードで検索できる単行本が増えている。加えて、35 歳以上で初産の有名人が書いた著書などを併せると本稿末尾の表

の通りの結果になる。

さらに、20代から30代向けの女性向け雑誌においても近年出産について特集が組まれるケースが増えているが、このなかに少なからず「高年初産」または「高齢出産」にかんする記事が含まれている。これは前述の高年初産や高齢出産の割合の高まりにリンクするが、テレビ番組や雑誌の特集記事といったメディアが女性たちの高年での出産という現象に着目しているということ、かつ視聴者・読者である女性たちにとってそれが興味をもって消費できる話題であることの双方を示している。

ところで、高年初産や高齢出産の増加や、社会がそれに注目しつつあるということについては、これまでは十分に考察されてこなかったのではないかと思われる。たとえば、産婦人科領域の専門誌に掲載される高年初産、高齢出産の増加に関する説明の典型的な例として、以下のものがある。「平均寿命の延長、長寿化の中で女性の生活環境も大幅に変化をとげ、社会生活への活発な参加に伴い、晩婚、高齢出産が増加することとなった」（平原ほか 2001：749）。この中の「社会生活への活発な参加」と「晩婚」が高年初産、高齢出産の理由としてよく挙げられる。だが、高年初産のひとつひとつの事例を丁寧にみて、その女性が35歳を過ぎての出産にいたる過程を十分に検討した文献は非常に少ない。

冒頭で、80年代後半期に書かれた、女性の妊娠・出産についての社会学研究者の文章を引用した。社会学や女性学、フェミニズムの領域においては、とくに80年代以降において女性のライフイベントとしての出産の意味について問う研究や、「母性」の社会的な構成のされ方についての研究が盛んにおこなわれ、その蓄積も十分であると思われる[1)]。だが、増えている高年初産および高齢出産について、女性たちがどのような経緯をたどってそうした選択をおこなってきたのか、また「高年」で出産を選択することについてそれが若い時期に出産を選択すること、あるいは出産する選択をとらないこととどう違ってくるのか、その時期に着目した研究はまだ少ないといえるだろう[2)]。

このように判断して、以下、現代日本の高年初産にかぎってその事例研究を試みたい。方法としては高年初産の経験を持つ女性お二人のケースについて、その略歴、妊娠中の経過、出産、その後の育児、高年初産という経験についてなるべく具体的に尋ね、それらについて考察を加えた。もちろん、２ケースのみの事例研究であるので、これらが高年初産について過去言われてこなかったことのすべてを提示するとは言いがたいし、今回取り上げる事例には生殖補助医療の対象者など、高年初産の研究において含まれるべきケースが入っていない。ただ、先に述べた本稿の主題についての社会学的研究は管見のかぎりでは皆無であり、ここでの作業はその開拓的な仕事の一つという位置づけである。

研究の手続きについて、てみじかに記しておこう。主題を設定したのち、筆者はおおまかな調査票を作成し、2006年から現在までの間に高年初産を経験した８人の女性について聞き取り調査をおこなった。彼女たちに対しては、ひとりあたり１時間半から４時間におよぶ面接での調査をおこない、これをテープレコーダに録音したのち、完全な起こし原稿を作成した。以下の２つの事例は、その抄録である。

調査にあたっては協力者に主旨を説明した上で、録音と起こし原稿作成、報告書等に発表することについての同意を得た。なお、以下の事例の抄録については、対象者のプライバシーを守るために、考察にさしつかえない範囲内でいくつかの事項を変更していることをおことわりしておく。

2. Ｓさんのケース

略歴　1960 年代の半ばに生まれる。大学院博士課程修了。現在は大学教員。夫は大学非常勤講師。子どもは聞き取り調査時点で１歳。

（1）妊娠していた頃のこと

妊娠がわかったのは 38 歳のときのことでした。自宅で妊娠検査薬を使って検査し、わかりました。子どもが欲しかったので、夫ともども喜びました。ただし、わかった日の翌日から、科研費のグループによる２週間ほどの沖縄調査が予定されていました。夫は体調を心配して行くことに反対しましたが、私は研究第一と考え、調査に出かけました。連日飛行機に乗って移動するハードな旅で、調査中、体調を崩して現地の病院へ行きました。調査に参加したことに後悔はありませんが、皆に心配・迷惑をかけたと思います。調査が終わってから初めて産院へ行きました。

産院は家から歩いて 10 分ほどのクリニック（産科、婦人科、小児科があり、産科の常勤の医師は２名）に通っていました。仕事をしながらたびたび検査に出かけるには、近いところが一番よいと考えたからです。また、夫が妊娠・出産の勉強をしたり、出産時、出産後の手助けをしたりするために通うときの便利さも考慮しました。ほかにも、産院の勤務者（看護師や医者、事務員など）の対応もよく親切なこと、規模も中の小程度で、すぐ前に公園があり落ち着くこと、ソフロロジーという出産方法や、自然分娩を重視する姿勢（出産日などを病院の都合でコントロールしないことなど）も大きな決め手となりました。

でも、高齢出産ということで、私の母親は万一のことがあっても大丈夫な医療設備の整った大規模病院にしなさいと大反対（ちなみに私の選んだクリニックは手術も可能）でした。そこで、妊娠３ヶ月から８ヶ月くらいまでは近くのクリニックと別の総合病院とのダブル通院で、かえって時間をとられて大変でした。最終的には、３分医療ではなく、話をじっくり聞いて、より親身になってくれると思われた近くの病院一本に絞りました。

高齢出産であることは意識しました。子宮筋腫が多くあることが分かり、「流産をしやすいので、仕事はやめなさい。また、胎児が大きくなると腹痛が出てくるでしょう。」といわれて最初は心配しました（母体のことも胎児のことも）。しかし、毎日朝から晩までの仕事ではないので、仕事は出産１ヶ月前までおこないました。幸い、子どもも順調に大きくなり、腹痛もなく健康に妊娠期を過ごしました。高齢による胎児の病気などは特に心配しませんでしたし、出生前診断も受けませんでした。

つわりは軽かったです。１日だけトマトを食べて夜吐いただけ。おなかがすくと気持ち悪くなりましたが、チーズを食べると回復していました。妊娠最後の方は体重が 15 キロ近くも増え、足がむくみ、妊娠中毒症になりかかりまして、薬（たしか漢方薬）が出ました。

妊娠中は医師に「たくさん歩きなさい」と言われていました。もっともなことと思ったのですが、締切の仕事が産休中もありまして、パソコンに向かう日々で運動したくてもあまりできませんでした。そのためか（ストレスもあり）予定日が２週間近く過ぎても生まれる気配がなかったのです。１週間過ぎたときにはさすがにあせって仕事を中断し、出産前の３、４日は毎日６～７時間歩き続けて、なんとか帝王切開をまぬがれました。

（2）出産について

出産は、夫立会いのもとに陣痛が始まってから７時間ほどで生まれ、安産でした。助産師さんが「上手よー」と励ましてくれたので、比較的リラックスして産めました。出産よりも、そのあとのいきんで破れた箇所の縫合が長くて辛かったです。その夜は興奮のため、なかなか寝られなかった。仕事の用事のついでに携帯電話から出産報告を友人の何ヶ所かに送りました。

翌日、子どもと同室してはじめて子どもをじっくり観察したと思います。赤ちゃんは人間離れした崇高な感じがし、新生児は「神聖」児と思いました。５日ほど病院にいて、さまざまな方の訪問を受け、夫も毎日顔をだして楽しかったです。自分が人生の主人公に初めてなった気がしました。シャンパンつきのゴージャスな祝い膳も病院ででて、記念になりました。

母乳を出すよう体が変化することはきつかったです。夜中に急に悪寒がしてふるえて、乳腺がピキピキと開く様子がわかりました。身体を誰かにのっとられたようで恐かったです。母乳を出すことがこんなに痛いことだとは知りませんでした。産休が終わって仕事に復帰後、母乳のことで苦労しました。具体的には胸がはって痛いので、大学で絞り器をもっていき、授業の合間にしぼったりしたことです。また、花粉症の薬が母乳をあげていると飲めないため、鼻がでてきて赤ちゃんの世話が大変でした。それが理由で４ヶ月で母乳をやめました。

（3）子どもとの暮らし

子どもが生まれてからの変化で大きなことは、外に出ると、知らない人々からよく話しかけられ、親切にされることが多くなったことです。また、両親は孫の面倒をみてくれることが多くなり、私と親との関係が以前より大変密になりました。仕事が忙しいときや出張があるときは両親にあずけています。そっち（片道３時間ほどかかる）と自宅の往復を何回もすることで苦労しております。ただ、子どもが１歳を過ぎてからは、子育てはだいぶ楽になってきました。

実家の母は現在（高齢の）自分の母親を看ているので、全然育児なんかしたことのない、戦前生まれの父にかなり助けてもらっています。父は若い頃はゴルフだ仕事だって言って土日も家にいないような人でした。だから母一人で専業主婦でわれわれをみていた環境だったのです。父は九州男児で、買い物に行くのも嫌だったんですね。定年になって仕事辞めたあと、（市販の）お惣菜とかいろいろありますが、ああいうものを買いに行くのも手伝いたくないとか。今は実はやっているんですけど。そういうような、「男たるもの」みたいな人だったのが、もうやむを得ないですよね、自分の母を看ている妻の姿見て。まあ、ちょうど定年になったし自分が、って言って乳母車で散歩するのが今は好きです。だから父の変化を、父の友人とか父の住んでいるところの近所の人とかとってもびっくりしている。顔つきから言うことから違って、「子どもって可愛いね」なんて。全く逆の、自分の趣味とか人生が大事っていう人だったのが。みんなひっくり返ってます。前は神経質そうな、喋らない堅物のエンジニアだったのが、いまは顔つきも柔和で怒らなくなったし。

私自身は子どもを持つことによって、子ども一般に関心がわき、かわいく思えるようになりました。また、守るべきものがいることで生きる励みにもなりました。人間関係もより円滑になり、友人も増

えました。行動範囲も広がって、子どもの認識、目線などから人間や生物などについて多くを学ぶことができました。長いスパンでものごとを考えるようになったと思います。

（4）高年初産・高齢出産について

高齢出産という概念を知ったのは大学生の頃かと思います。自分については、30 歳くらいまでは自分のことに一生懸命で（博士課程では海外に住み調査をしていた）、出産はあまり考えられませんでした。29 歳で研究者だった前の夫と結婚、30 歳を過ぎたあたりで子どもが欲しくなりましたが、最初の結婚相手は自分の研究のことに一生懸命で子どもを欲しがりませんでした。35 歳になって、自分の体のことを考えるとそろそろ決めなきゃって思ったんですが、彼は「いらない」と。それ以外にも家庭ってなんだろうかとか、子どもいなくても二人で協力していけばいいけど、なんかとにかく自分のことに一生懸命ですれ違いが起きて。離婚を決意し、博士論文も書き終わったところで今の夫と再婚して、子どもも二人で欲しいなってなったから妊娠・出産をしました。それでもまだ今はキャリア形成の半ばなので、出産は早すぎた感もあります。身体的には当然早過ぎませんが。

高年初産のメリットは、心に余裕があり、すぐ怒ったりしなくて済むことだと私は思います。また、「よくぞ産まれてきてくれた」という思いが強く、大切にしますし。ある程度、自分の方向性が決まってから（足場を固めてから）産むので、仕事などをやめなくてもよい、あるいはすぐ復帰できることが大きいです。

逆に、デメリットとしては体力的にきついこと。加えて、自分の孫がみられるかわからないとも思います。あと、迷っていることとして 2 人目のことがあります。気持ちとしては欲しいんです、きょうだいって。でもいろんな面で経済的なこととか家の広さとか、今後仕事がますますできなくなるとか。また、2 度目に大学を休んだときに果たして前回のように受け入れてもらえるだろうかっていう不安。そんなにね、（1 人目を産んだあと）5 年も 10 年も間隔空けられないとすればデメリット考えるとちょっと二の足をふむ。この前も区の 40 歳を対象に無料でやっている婦人科の検診を受けたんです。そしたらそこの先生が「これだけね、あなた子宮筋腫があるから、産むんなら今すぐ。妊娠、40 歳になったばっかりだし頑張りなさい」と。

夫にも話したんですよ。二人で困ってしまいました。一応の結論は、今年とか来年は産まない。無理。それはだから、子育てが大変じゃないんです、2 人目の問題は。親のサポートがあるのでありがたいです。ただし、これは私たちの決心にはそんなには影響してないんですけど、うちの親は「もうやめなさい。一人で十分」って。

考察

Ｓさんは、気鋭の若手研究者である。彼女自身の言葉を借りるならば、現在「キャリア形成の半ば」にあり、博士論文を書き上げたばかりの自分にとって、出産は早すぎた感もあるという。妊娠・出産・子育てにおいて、彼女がこれまで築きあげたキャリアをいかに守ってきたかは、話のはしばしに現れる。まず、妊娠判明後の翌日から科研費のグループによる調査旅行に出かけている。また、勤め先の業務も出産予定の 1 ヶ月前まで続け、産後は 2 ヶ月で復帰している。もっとも、育児休暇を取らな

かったことについては、その期間に支払われる給与が十分でなく、大学で常勤の職を得ている自分が一家の大黒柱であるため休めなかったとも語る。分娩した直後には、携帯電話から友人に出産報告をしているが、それも「仕事の用事のついで」である。自分の授業のために非常勤の人を３人頼んでおり、そこにまず連絡を入れた。ここに彼女の研究・教育職としての高い職業意識が見出せる。

また、子どもや自分の体の変化を観察する視点も鋭く繊細である。母乳が出るように体が変化するさまを「乳腺がピキピキ開く様子がわかった」といい、「身体を誰かにのっとられたようで怖かった」という。対象を丁寧に見つめ、自分の感覚・感情でさえも客観的に把握するやり方は、彼女がこれまで続けてきた研究という作業によって補強されたのではないだろうか。

出産後の子育ては、実家の親が頼りである。仕事が忙しいときや出張の時には片道３時間ほどかけて実家に子どもを預けにゆく。ただ、こうした実家頼みの子育てには彼女の親の強い意向が反映している。彼女自身は保育所などの外部の施設・サポートに頼りたいという思いがあり、妊娠中も区の相談窓口に情報収集に行き、また保育所や保育ママの自宅訪問をおこなった。子育てサポートセンターに登録も済ませてある。しかし、彼女の親たちは、他人に子ども預けることに反対しており、保育所に行かせるくらいなら自分たちが面倒を見るといってきかない。結局、Ｓさんが折れる形で現在は実家の親に頼っているという現状がある。

「30 歳くらいまでは自分のことに一生懸命で出産はあまり考えられ」なかったというが、これは仕事上のキャリアを積む大卒・大学院卒の女性たちにかなり共感を持って受け止められる意識なのではないだろうか。加えて、30 歳を過ぎても職場や、同業の者たちの組織などにおいて（研究者の場合は研究グループや学会など）、30 代の女性というのは使われやすい存在である。聞き取り調査に応じてくれた別の女性は、ある同業者組織の親睦団体事務局での経験を以下のように語った。「（同じ事務局にいた）37、８歳の独身の女性がいて、ややこしい仕事を全部彼女に（役職者は押し付けた）。なんだかんだ言って、「まあ身軽な方が…」みたいな感じで押し付けられている。自分より５年後輩の独身女性が別の職場にいて、これも独身で使い倒されている。既婚男性よりは独身女性のほうがって、それを理由に使われているっていうのが、平等なように見せかけていながら、なんかその、男性は家に帰ったら子どもの面倒を見なきゃいけないとかなんとかかんとか。それで、同じ年齢の男性と女性がいるとしたら、片方の男性が既婚で女性が独身だったら、決定的に独身女性のほう、あるいは子無しの女性に重い役職がだーっと行くっていう、なんか不思議な圧力っていうか。それをずうっと目の当たりにしていて、そこの事務局でも、後輩の職場でも外部との交渉とか、そういうのをみんなその後輩女性がやっているのを目の当たりにしましてね」。

しかし、Ｓさんの初産が 30 代後半まで遅れてしまったのは、キャリアを積むことに専心したからだけではなかった。それは、最初の夫の意向である。子どもはいらないという彼の意志は、子どもをほしいと思った彼女に最終的には離婚を決意させた。幸いにして新しいパートナーを得た後にすぐに子どもを授かり、出産に至った。目下の悩みは、外部の組織に保育を頼ることに対する、実家の親との考え方の相違である。

3. Ｙさんのケース

略歴　1960 年代前半生まれ。看護師として 18 年近く勤務後、結婚後 1 年目の 39 歳で第 1 子出産。41 歳で第 2 子を出産し、子どもは聞き取り調査の時点で 4 歳と 2 歳。仕事は第 1 子妊娠中に辞めており、現在は専業主婦である。夫は会社員。夫婦ともにクリスチャンである。

（1）妊娠について

母親になりたいという思いは昔からあって、妊娠、出産のリミットについては 40 歳前には子供を 1 人欲しいなって思いましたね、特に相手は決まってなかったんですけど（笑）。まあ、叶えられたのですが。40 歳を過ぎるとやっぱりリスクが高いっていうのが、自分の中に思いがありました。

夫と最初に出会ったというか遠目に見たのが結婚する前の年の 4 月なんです。彼の洗礼式のときが最初の出会いでした。そのとき教会に 300 人いまして、洗礼したうちの一人が彼で「ああ、ああいう人がいるのか」って。その後、食事会かなんかで親しくなって、まあお互い魅かれて、結婚したと。まあ、ほんとに、付き合って早かったです。結婚をするまで半年も無かったでしょう。

夫は私より 2 歳年下で、結婚したのが彼が 35 歳で私が 37 歳のときでしたか、まあ、お互いの年齢もあるし、最初から子どもをつくることは意識していました。ただ無理はしないで「出来れば欲しい」、ということで。例えばね、治療に通ってまではいいね (必要ないよね)、っていうコンセンサスまでは付き合っているときから話はしておりました。幸いすぐに妊娠しました。

高年初産であるということは、（看護師という）職業柄、リスクを伴うってことは理解しており、例えば染色体異常などを気にしていました。自分自身のことについてはなんかその頃は妙に健康に自信があったので気になりませんでした。ただ、（結局しなかった）羊水検査などについては、やっぱり与えられたという思いがありました。私は 38 歳で結婚して、それで出産が 39 歳だったのですが、仕事してて子どもを持てるかどうなるか分からなかったのです。だからまあ結婚できたことも、子供が出来たこともきっとこれは神様の恵みだっていうようなことがかなり大きな支えになりました。それでもう委ねてしまおうと。そういうことです。

仕事は妊娠 8 ヶ月くらいまでしていました。産休に入るちょっと早めに辞めました。ほんとは産休まで待っても良かったのですが、ずっと働いていましたし、妊娠に専念したいという思いがあったのです。ちょっとゆっくりしたいと。

妊娠中は本を読んでそれで知識を得ていました。あとはそうですね、１人目を産むときはとにかく順調だったから。だから自然体でした。別に運動したわけでもないですが仕事が運動みたいな形で。幸いそのときだけは夜勤が無かったのでまあ大丈夫でしたよ。順調でしたし、うまく自然体で食べ過ぎてって（笑）感じで。体重増加になりました。

通院していた産院もみなさん私が看護師だって知っていましたし、年齢的にも、そんな若くて産むわけじゃなかったので、そんな「こうしなさい」「ああしなさい」っていうようなアドバイスを別に受けたことは無かったです。大丈夫だと思われていたのでしょう。そうではなかったのですけど。やっぱり初めてでしたし。

２人目のときは、40 歳で妊娠して 41 歳の出産でした。つわりはそんなひどくなかったのですが、上

の子がまだ１歳でした。だからまだ、手がかかる状態だし甘えたいし、お母さんつわりでゴロゴロしてられないといいますか。ちょっとゆっくりできなかったので第２子のときはしんどかったです。落ち着くまでは。

子どもの数についてやはり主人も私も、「いないか複数かどっちかだよね」と言っておりまして、一人っ子は絶対可哀想だと。なんかスポイルしちゃったりしたら良くないしということでとにかく、２人は欲しかったです。それで、年齢的なものもあるからとにかく、ぜんぜん不妊治療はしなかったのですが、まあできたら２人目が欲しいという思いが最初からありまして。年子も覚悟していました。１人目が小さいうちはしんどかったのですが、出来たらまあ喜んでという感じでした。

（２）出産について

お産の経過について１人目のときは自然に陣痛が来て、それで産院に行って、で子宮口が固いし多分（時間が）かかるだろうってことでした。それで、誘発しましたらＭＡＸというか、かなりギリギリまで誘発剤を先生が入れたのです。ちょうど土曜日で、もし帝王切開になるにしても代わりの先生の連絡がつきづらい日で…「まあ、明日だろう」って言われたら、とんでもなくすごくバァーっと陣痛が来て、ぐわっと開いて、産まれちゃった感覚が。陣痛が１時くらいに来て、産まれたのが夜の９時だったのです。

自然に何にもしなければ多分翌日だったと思うんです。でもかなり（誘発剤を）入れたので、それでバァっとこう。圧縮して、すごい激痛の元に産まれたという印象です。

看護婦さんが「ええーっ」って（言っていました）。夜だから１人しかいなかったんです。これだったら誰かに残ってもらえれば良かったというような状況で、大忙しで。私も初めてで１人残されてしまって、不安で。恥ずかしいのですが、看護師でしたけど「看護婦さん助けてー」と（笑い）叫ぶほど何か、壮絶なお産でした。それでもうバタバタしたから主人が立ち会うのもなんか話もしてなくって、主人は廊下でただこう絶叫を聞いていて（笑）。それから、産まれてもしばらく入れてもらえなくて、という感じでした。だから実はあんまりいい記憶は無いのです。

２人目のときは、１人目とは違う産院でした。そこで糖負荷試験をやったら境界型の糖尿病ってことで食事制限が付いて。それだけならよかったのですが、妊娠中喘息に罹患してしまいました。だから、結構波乱万丈といいますか。薬を飲みながら妊娠経過して、それでやはり（子供の体重が）大きかったのです。３ヶ月くらいで「大きい」って言われていまして。まあそういうふうな、糖尿病だと巨大児になるって話があるのですが。どんどんどんどん大きくなりまして。機械の関係だったのでしょうけど最後の診断で4,300（kg）あるかもしれないとかって。「緊急に入院してください」って言われて。で、陣痛は無かったのですが、バルーンを入れて膨らまして、そしたら陣痛がついて産まれたっていう形でしたね。産まれてみたらやっぱり、3,900（kg）近くて（笑）。

（３）育児について

育児については、１人目のときはもう夫婦二人で頑張ろうって。主人がそのとき比較的フレックスタイムが使えたので、だいぶ主人に仕事を休んでもらいました。それで乗り切りました。土曜日だっ

たので誰も呼ばなくて済みました。ですので全部主人がやりました。私の母がすでに亡くなっていて、母には来てもらえなかったですし。主人の母も、そのとき別に呼ぼうって気にはならなかったです。なんとかなるだろうって。乗り切りました。

最初の子どものときは最初夢中でやっていて、最初の外出が日曜日の礼拝でした。子どもを連れて。１ヶ月くらいでしたか。いろんな知っている人もいるし、メッセージも聞けるのでいいかと思いまして。

２人目の時も大変でした。１人目の世話をしながら、というよりも、赤ちゃんの世話をしながら上の子の世話（は大変）。２人同時に欲求があるときって、おっぱいのときに、やっぱりやきもちだったのでしょうけど、ペタッとくっついてきて「ママ、水飲みたい」とか「これしたい」とかって言ってきたのです。別に急ぐ用事じゃないと思うのですが。２人同時にその子たちにやってあげられない、当たり前なのですが、その期間が結構やはり長かったので。

教会に通うことが心の支えになったというのは、その年は同じくらいに、同じ日に産まれた子もいるし結構身近な人が出産ラッシュだったのです。お互い励ましあって、お互い子供の成長を喜び合いながら、同じような状況のお母さんたちとの支えがありました。お互いに助けられました。「誰々ちゃんこんなことが出来るようになった」って。それから週に１回赤ちゃんクラスというのが教会でありまして、そのときのために色々とプログラムしてくれる方がいて、サポーターもいらっしゃって。ほんとに具体的な励ましとか方法とか情報をいただいて。すごく支えになりました。

（４）周囲との関係の変化

夫との関係は、産後てんてこ舞いでしたので戦友みたいになってしまいました。だからもう、ロマンチックなそんなのもぜんぜん無くなりましたし。とにかく共同者というか、何と言いますか、お互いやってないと事が進まないから。二人だけのときの彼に対する思いと子供が出来てからの思いが、うまく言えないんですが、変わりました。多分、夫婦の成長過程なのかな、と。でも共に子供に対しているときって、「何が出来た」「何が出来た」って全部記念日になるような感動があったので、二人で喜んで。

産後の変化については、独身が長かったので、いきなりその、ママ友だちが出来たといいますか(笑)。「いやこれは、私には無かった世界だな」と。もしかしたら、そういうのが無かった可能性もあったわけですし。どちらかと言うと遠目に見ていた世界だったのです。ですから、母親ってこんな気持ちなのかとか、そういう分かち合える世界が変わりました。だから良かったなと思っています。独身のままだったら、子どもがいなかったら分からなかった世界です。

子どもができてから変わったねと、私すごく言われるのです。そんなキリキリしていたつもりではないのですが、「柔らかくなった」と。何と言うのでしょう、安定したふうに見えたのでしょうか。アメリカ人の男性が、「なんか元気になりましたよ」と(笑)。元気というか「いいふうになりましたよ」って言いたかったようです。あとは看護学校時代の友だちの、小さなクラス会みたいな集まりに第１子妊娠中に出席しましたら、その中の一人が「やっぱ変わったよね」と言いました。学生時代と比べたら相当丸くなったと。若い頃はやはり意気盛んでしたから。

（6）仕事について

仕事についての未練は、最初はありませんでした。もっと落ち着いてからですか、よく自分が現役の頃の夢を見ました。…ということは潜在的に…働きたいとまでは思わないのですが。日々の自分を考えると子育てプラス仕事と思うと逆にこれはもう大変だなと思うので。周りの人から何でこんなに聞かれるのだろうと思うくらい、第1子が産まれたあとに「復帰をしないか？」って聞かれました。こちらは「そんな、今産まれたばかりなのに」と思って。

仕事は17、18年続けてきましたし、最後の4年間は看護学校で教えてもおりました。最終的には婦長の下の地位にいました。それもあり「仕事もったいない」とか「仕事はしないの？」とか今でも言われますが、とてもとても。仕事は代わりの人はいますが、自分の子を保育所に預けて、他の係りの人に世話をしてもらうというのは、自分はそういうのに堪えられないと思いましたし、それは違うのではないかと思いまして。例えば経済的なことが許すならば（働かないで）、子育てというのは一時期と聞いていましたので。小さい時期は一時期ですし、かわいい時期も。小さくてかわいい時期も過ぎ去るから、それを満喫したいし、自分の手でと思っていましたので、とにかく仕事復帰のことが「ふっ」って意識に上っても、「ああ違う、違う」と（否定して）（笑）。

ただ、フルタイムはちょっと難しいからパートで働くという青写真もありましたし、子供を幼稚園に預けたりとか子育てを通して保育士さんっていいな、とも思ったのです。通信（教育）でも保育士さんの資格が取れるって聞いたので、それで保育士の資格を通信（教育）で取ろうかなと。それとケアマネージャーって資格が最近ありますよね。教会で介護のこととかそういう働きをしているので、ちょっと役に立てるかなと思って、その資格を取ろうかなって思っていました。夫の転勤の話が出たのでストップしたのですが。子育ての経験を通して勉強したいなと思った保育士さんとか、役に立てるならばケアマネを取ろうかなと思いまして。最終的にその2つを活かせて、教会などで働きたいなという思いがありました。

私自身は大学には入れなかったから、看護学校で働いているとき同時に大学の通信教育課程で教育学を専攻していて、最後は子育て中だったので足掛け12年かかったのですが一応卒業したのです。当時は、看護学の修士に行きたいって思いがありました。（子育てが）もうそうやって始まってしまったら、それが遠のいてしまいました。今回転勤した後はどうなるか分からないのですが、それも視野に入れてまあゆっくり考えようかなと。

（7）高年初産について

高齢出産という概念を知ったのは看護学生のときです。その頃はまだ30歳（という定義）でした。自分が結果的に高年初産を選択したというよりは、結婚相手が現れなかった（笑）ことと、ですからなるべくしてなったっていう感じでしょうか。あえて、計画的に選択したというのではないです。自然にそうなったといいますか。

結婚は、したくなかったではないのです。ただ、そういう人とめぐり合わなかったのでしょう。こんな人と結婚するのかなあとかイメージは持っていて。多分職場にもうちょっといたら、分からない

ですけどね。管理職にあがると、独身の婦長さんでかなりバリバリやる人もいるけれども、きっと私の場合は厳しかったかなと。ものすごくハードな職場なのです。ですからちょうどいいときにめぐり合えたというのもあって。ほんと全部が計画されたことだったのかなというか。ある程度一区切りを付けるところまでやったので、そのときほんと全く未練がありませんでしたし。結婚して、生活が変わって。

高年初産のメリットとしては、とりあえずいろんな経験というか仕事の経験とか年齢的なものとかから、右往左往しないってことでしょうか。あと落ち着いていられるということと、感情的になることもあるのですが、子どものことにおおらかにいられることです。

デメリットは、やはり体力です。それに尽きると思います。他のママ友だちがだいたい10歳下なのです。30代くらいの方たちで、やはり（彼女たちと比べると）体力的にギャップがあるんだろうなと思います。

高齢出産に必要なサポートについては、とにかくその人の話を聞いてあげるとか、何とか教室とか何とかクラスとか出ずに、その人に真に親しくなって、その人からのそのときの悩みを聞いて、自分の持てる知識をあげたりとか。やはり、人それぞれ違うでしょうから。私、欲しかったのですが高齢出産の友だちがいないのです。いても離れて住んでますし。第２子とか第３子で同じくらいで産んだ人はいるのですが、初産でっていう人は（いない）。最近ようやく出来たのですが、そういう方と、初期の段階で知り合ってお互い励ましあえたら、もっと力づけられたんじゃないかなと思います。私、そういう方はいなかったけど、若いお母さんたちと、励ましあって来られたから良かったのですが。どこかにサークルではないですけど、そういう方たちだけの集まりがあってもいいということです。

考察

Ｙさんは看護学校卒業後、18年近く看護師として働いてきた。話のなかにもあるとおり、最終的には婦長の下のポジションにまで到達し、看護学校で指導する立場にもあった。また、時間がかかったものの、通信制の大学において教育学を専攻し卒業するなど勉強熱心である。今後の自分の人生設計についても、保育士やケアマネの資格取得に意欲を持っている。第１子出産後の彼女に職場復帰の話が湧いたというのも、彼女の仕事ぶりの有能さ、新しい知識を獲得することについての旺盛な意欲がそうさせるのだと思われた。

Ｙさんは、かねてより子どもはいつかは欲しいという気持ちを持っていた。だが、彼女の言葉を借りるならば「結婚相手があらわれなかった」ので、30代の半ばを迎える。結婚したのは37歳のときで、相手は前年に知り合った同じ教会員の夫であった。夫がその頃に洗礼を受けたことがきっかけでめぐりあえたわけであるが、お互い年齢のことを意識しており、結婚までは比較的早かった。そして、めでたく自然妊娠により第１子、２年後には第２子を授かった。

Ｙさんが結婚相手にめぐりあえなかったというのは、「ハードな職場」での長年の勤務形態と、彼女自身がクリスチャンであり、できれば同じ信仰を持つ相手を望んでいたことによるところが大きい。そして、神のめぐみか、めでたく30代後半に結婚・出産をするこができた。夫とめぐりあわずに、あのままあの職場にいたらどうなっていたかわからない、と彼女はいう。業種を問わず、彼女のよう

に有能な専門職の女性たちであれば、相手に出会うことの時間的な難しさと機会のなさがあるのではないか。高学歴化によって婚姻年齢が後方にシフトしたとはよくなされる説明であるが、高いモチベーションと安定した職場でのポジションを持っており周囲の期待も大きい女性であれば、学歴と関係なく忙しい日常を送らざるをえない。

また、うまく結婚相手をみつけて妊娠に至ったとしても、フルタイムで仕事を続けながら子育てをするのは非常にハードである。「小さいくてかわいい時期は一時期」なので「それを満喫したいし、自分の手で」と言う彼女であるが、「自分が現役の頃の夢をみる」ことで、潜在的には実は自分は働きたいと思っているのではないかとも分析している。

4. むすびにかえて

以上でみてきた２つの事例と、ここで詳細に紹介できなかった他の事例についての情報をあわせて、高年初産の研究において今後より深い考察が必要であると思われる事項を以下に５点挙げておく。

（１）高年初産の理由として「社会生活への活発な参加」、あるいは「女性の社会進出」ということがこれまで一括りに言われてきた。現実として職業が長くなることによって子どもを持つことが延期されていたとしても、その内情は人によって多種多様である。Ｓさんの場合、20 代は研究者としてキャリアを形成していくのに必要な時間であり、子どもをもつことは考えられなかった。今も、体のことはさておき、早すぎたかもしれないと思っている。まだこれから研鑽を積まないといけないと考えている自分にとって「ブランクが空く」ことは怖いことである。「やっぱり（共同研究などで）声がかかったとき、それを子育てを理由に断ることができないのは、もう声がかからないんじゃないかという不安が。自分の地位とか立場、キャリアがまだ研修途中っていうのがあるんですよ。将来の発展が妨げられるか不安になって引き受けてしまう。チャンスがあれば仕事のチャンスを取りたい、となると子どものほうに関わる時間が削られちゃいますね」。

また、Ｙさんの場合は「ハードな職場」であり、そのことによって結婚相手にめぐりあうチャンスがなかったという。そのハードさと育児を両立するのは難しく、彼女は周囲に惜しまれながら仕事を辞めてしまった。どのような業種であれ現代日本の仕事の多くが、出産や子育てに関わらない人が働くことを基準に成立しており、どこかでそれを意図的に線引きしないと女性たちは子どもを持つこともままならない。線引きは、Ｓさんにおいては子どもを欲しがらない夫との離婚、Ｙさんにおいては仕事を辞めることであった。なお「ワーク・ライフ・バランス」という言葉がキャッチ・フレーズのように叫ばれている現代の日本において、仕事を続けたいと考えている女性たちが子どもを育てながらそれを継続することがいかに困難であるかは荻原久美子『迷走する両立支援』に詳しい（荻原 2006）。

（２）高年初産においては妊娠してからの母体側および胎児側の「リスク」がよく語られるが[3]、それ以前に 30 代後半の女性たちは生活習慣病や婦人科疾患に罹患する割合が高くなる。このことが、妊娠そのものを遠ざける場合がある。Ｓさんの場合、子宮筋腫があり、二番目の子どもをつくるなら今すぐにと医師から言われた。ここで紹介できなかったケースにおいても、卵巣に腫瘍があって妊娠が難しいと言われた女性がいる。双方とも、それを乗り越えて妊娠に至っているが、

持病をかかえつつ妊娠・出産・育児をする可能性が高いという点が、若い年齢におけるそれとの違いである。

(3)高年初産婦たちの親は、それよりも若くして子どもを持つ女性たちの親に比べて高齢である確率が高くなる。必然的に、死別していたり[4)]、子育ての援助を頼めなかったり、または現代的な妊娠・出産・子育てに反する考えを保持していたりする。Ｓさんの親たちは子どもに日光浴をさせろというが、Ｓさん自身は紫外線の被害を気にする。

他の事例では、自分が高年初産であることで義理の母親が帝王切開を薦めたり、母乳が足りないのではないかとやたらとミルクを足したがる話があった。いまの高年初産婦たちの母親たちは、1960年代の自宅出産と病院での出産の割合が逆転した頃に自らの妊娠・出産・子育てを経験している。医療的な介入や粉ミルクに対する信仰があり、なるべく「自然」にすることを謳う現代風の妊娠・出産・子育て観と大きく考えを異にする。同様に、高年初産婦の母親世代は専業主婦率が高く、保育所などの施設やサポート・サービスを頼る育児に否定的である場合がある。こうしたギャップが現代の高年初産婦を悩ませる。

(4)高年初産を経験した女性たちにとって、次の課題は「２人目をどうするか」ということである。「一人っ子はかわいそう」「きょうだいは最低２人いたほうがよい」とする考え方は世間に広く蔓延しており、また親自身の考えもあって子どもを２人持ちたいとする人は多い。Ｓさんは、２人目を考えているが、今は持てないと判断している。また、Ｙさんにおいては子どもは「いないか複数かどっちかだよね」と夫と話し合っていたという。彼女は子どもが年子になることも覚悟し、結果的に２年後に２人目を出産した。初産の年齢が高い女性が２人目を持とうとするとき、それは更なるチャレンジであり、また40歳以降は妊娠が難しいとされているのであまり猶予がない。これも若い世代の妊娠・出産と大きく異なる点である。

(5)二つの事例をはじめ、高年初産の経験を持つ女性たちと接触して強く感じたことの一つが、「子どもを持って育てること」について、どの人も確固たるポリシーを持ち、その選択にゆらぎがないということである。妊娠と出産についてはそれを「選択した結果」ととらえ、それが子育てにおける態度によい方向に作用しているように思われる。Ｓさんは「よくぞ生まれてきてくれた」という強い思いがあるために子どもを大切にし、また「ある程度、自分の方向性が決まってから産むので仕事をやめなくてもよい」という。Ｙさんにおいては、「いろんな経験というか仕事の経験とか年齢的なものとかから、右往左往しない」ことをメリットとして挙げる。そして子育てについても落ち着いていられると話す。

若い世代と比較すると、高年初産の経験者は妊娠・出産することに対する肯定感がより強いのではないだろうか。それは結果的に、自分自身の子どもという存在や子育てという行為への肯定感につながっていくように思われる。

冒頭でも書いたとおり、本稿は高年初産の社会学の開拓的な作業の一端である。今後とりかかるべき作業についていくつか記しておこう。まず、すでに聞き取り調査が済んである残り６ケースの事例の詳細な検討とさらなる事例の収集、そこから高年初産という社会的行為への一般化の仕事が残っている。たとえば雑誌記事文献においても、「高齢＋妊娠」「高齢＋出産」のキーワー

ドでヒットするものが近年増えているが、この内容についての詳細な紹介と検討などは急いで取りか駆るべき作業であろう。

また、高年初産とは、「子どもを持たない人生を選ばなかった」人々の選択であるともいえる。そこにおける人々の様々な事情や感情や周囲の力関係のダイナミクスなど、これも考察の必要となろう。さらに、「35 歳」5)「40 歳」という線引きに人々が敏感になっており、それが子どもを持つという人生の計画に影響しているという近代的な「年齢意識」（Cudacoff 1989=1994）についても、より詳細な考察が必要であると考えられる。

付記：本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）一般「現代日本における高年初産の社会学的研究」（課題番号 17510223）（平成 17 ～ 20 年度）による成果の一部である。

［注］

1）主な先行研究として、（落合 1989）（船橋 1994）（加納編 1995）（井上ほか編 1995）など。

2）ノンフィクションの領域においては、40 歳代で初めての出産をした 7 つのケースについて取材した（新井 2006）の先駆的な仕事がある。

3）「高齢妊娠・出産のリスク」について、産婦人科医が執筆した『自分たちで選ぶ　高齢出産』にはこうある。30 代後半から卵巣機能が衰えてくるので不妊率、子宮筋腫の発生率、成人病による妊娠中毒症の確率、ダウン症の発生率が高くなる。体力の衰えやその他の理由で妊娠・出産時に問題が起こる可能性が高くなる。流産率、帝王切開の率が高まり、体力の衰えが原因で出産後の育児がかなり負担になる。ただし、この本の読者層は高年初産を選んだ、あるいはこれから選ぶ女性たちであり、著者自身も 39 歳と 42 歳で出産したと書いている。また 10 代や 20 代と違い出産に積極的で初めてのことにも動じないなど、「高齢妊娠・出産のメリット」についても言及がある（堀口 1995：12–19）。

4）これは、「たまたま筆者が選んだケースがそうであった」としか言いようがないのだが、インタビューに応じて下さった 8 名の女性のうち、初産時に実母と死別していたケースが 4 ケースあった。

5）本稿の校正作業中に、ある若い人気女性歌手が「35 歳以上になるとお母さんの羊水が腐ってくる」旨の発言をし、批判が集まったことで活動を自粛するという事件があった。彼女をはじめとする若い女性の妊娠・出産についての知識不足を指摘する声もあるが、筆者には彼女が「35 歳」という年齢を挙げた点に、その年齢への女性たちのこだわりが見えて、非常に興味深かった。

表　高年初産・高齢出産にかんする文献（単行本）

	「高齢＋妊娠」「高齢＋出産」	「30代＋出産」「35才＋出産」	その他（右の検索によらない高年初産の関連本）
2007		小川隆吉、斉藤加代子『30代からの妊娠・出産Book』成美堂出版 笠井靖代監修『35歳からのはじめての妊娠・出産』ナツメ社	
2006	高原くるみ『高齢ママのかけこみ出産＆ゆとりの育児』新風社		新井容子『40代初産をはじめた女性たち』 情報センター出版局
	藤田素子『高齢出産ドンとこい!!2』ぶんか社		
	花舞美憂ほか『10倍大変100倍幸せ～850グラムのキミと出会って』 宙出版		
2005		『35才からの妊娠・出産・育児』（たまひよ新・基本シリーズ＋α ） ベネッセコーポレーション	
2004	藤田素子『高齢出産ドンとこい!!』ぶんか社	『30代からのすてきな妊娠・出産・産後』（別冊素敵な奥さん） 主婦と生活社	
	大葉ナナコ『産んでよかった！「高齢出産」』祥伝社		
	小林千枝子『「天の恵」騒動記』文芸社		横森理香『横森式おしゃれマタニティ　産後篇』（文春文庫plus） 文藝春秋
2003	白左木久美・和馬ほか『奥様はハイリスク妊婦』新紀元社		横森理香『横森式おしゃれマタニティ』（文春文庫plus） 文藝春秋
2002	清水久枝『悲しみにさようなら』北水	『30代からのすてきな妊娠・出産』（別冊素敵な奥さん） 主婦と生活社	
2001			桜沢エリカ『贅沢なお産』飛鳥新社
1999	小暮真理子『バンザイ！高齢出産・子育て』コスモ・トゥーワン	早乙女智子『あ、できた！30代からの妊娠・出産安心テキストブック』 永岡書店	
1998	石川恵美子『わたしが選んだ高齢出産』現代書林		
1997	大鷹美子『高齢出産』（女医さんシリーズ）主婦の友社		
1995	堀口雅子『自分たちで選ぶ高齢出産』（女のからだシリーズ） マガジンハウス		
1994	神野栄子『いきいき高齢出産』（Working　Womanシリーズ） スタッフWW		
1993	小暮真理子『オッパイはトマト』MBC21		
1991	『素敵なお産をありがとう』祥伝社		
1988	井上治代『高齢出産』亜紀書房		

［文献］

新井容子，2006，『40 代初産をはじめた女性たち』 情報センター出版局.

Cudacoff, Howard P., 1989, “How old are you?”, Princeton University Press. (=1994,　工藤政司・藤田永祐訳　『年齢意識の社会学』 法政大学出版局 .)

舩橋惠子，1994，『赤ちゃんを産むということ　社会学からのこころみ』　（ＮＨＫブックス）日本放送出版協会.

堀口雅子，1995，『自分たちで選ぶ　高齢出産』 マガジンハウス.

井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編，1995，『母性』　（日本のフェミニズム５）岩波書店.

萩原久美子，2006，『迷走する子育て支援―いま子どもをもって働くということ』 太郎次郎社エディタス

平原史樹・住吉好雄・山中美智子，2001，「高年妊娠の社会的背景とその支援」『周産期医学』 第 31 巻第 6 号.

加納実紀代編，1995，『母性ファシズム・母なる自然の誘惑』　（ニュー・フェミニズム・レビュー Vol.6）学陽書房.

落合恵美子，1989，『近代家族とフェミニズム』 勁草書房.

上野千鶴子，1993，『ミッドナイト・コール』　（朝日文庫）朝日新聞社.